

【特別寄稿】

「スペイン風邪」の日々 金沢の伝統工芸職人の日記から

The Life of People in The Days of Spanish Flu recorded in a Diary
by a Traditional Craftsman in Kanazawa, Japan

丸山 敦
MARUYAMA, Atsushi

キーワード：米澤弘安；流行性感冒；悪性感冒；日常生活；マスク

Received: 2021. 3. 16

はじめに

金沢市に在住した象嵌職人米澤弘安（1887～1972）は、1906（明治39）年から1972（昭和47）年に至る日記を残しており（『米澤弘安日記』¹⁾、以下「弘安日記」という）、このなかには史上最悪といわれた「スペイン風邪」に関する記述がある。この時期の弘安日記には、家族の動向が比較的詳しく書かれており、家族や親戚及び近隣の人びとの罹患に関する記述などが散見される。

この記述から、庶民生活の場における流行状況や流行下の生活状況を垣間見ることが出来ると思われる。本稿は、弘安日記を手がかりに、パンデミック（世界的大流行）下の庶民の生活状況を探ろうとするものである。

まず、「スペイン風邪」の実態について、当時の国の担当部局である内務省衛生局の『流行性感冒』²⁾（以下、「報告書」という）により、その概要と対応策について確認する。そして、弘安日記及び地元新聞の記事を参照することによって、流行状況の生活面での実相や対策の受け止め方等について検討する。

1. 「スペイン風邪」の概要

ここでいう「スペイン風邪」とは、1918（大正7）年秋から1921（大正10）年にかけて世界的に流行した流行性感冒をいう。1921（大正10）年12月に纏められた内務省衛生局の「報告書」では、海外諸国における流行状況・予防措置、我が国における流行状況（朝鮮・台湾を含む）、同予防・救療施設、流行性感冒の病原・病理・症候・治療・予防、欧米での流行状況・予防方法等、多岐にわたる検討を行っている。

1.1. 流行期と特徴

その患者数は、我が国においては約2,380万人余り、死者約38万8千人余りとされる。

「スペイン風邪」の我が国における流行の期間については、1918(大正7)年秋から1921(大正10)年秋にかけての期間とし、その間、3回の流行があったとする。

各流行期間における患者数及び死者数は表1の通りである。この数値は各都道府県からの報告によるもので、医師による報告を集計したものであるが、医師に診察を受けていないものが多数存在するようであることから、実態は更に多数であったと考えられる。なお、表下段には弘安の居住する石川県の数値を示す。

患者数・死者数ともに第1回が圧倒的に多いが、死亡率は第2回が飛び抜けて高く、第3回も第1回より高くなっており、2回目以降重症化の傾向が見られる。ちなみに第1回の患者数は、当時の我が国の人口の37.0%に当たる。

表1 流行期間別患者数・死者数

流行期間	患者数(人)	死者数(人)	死亡率(%)
第1回 1918(大正7)年8月 ～1919(同8)年7月	21,168,398	257,363	1.22
	142,396	3,935	2.74
第2回 1919(大正8)年9月 ～1920(同9)年7月	2,412,097	127,666	5.29
	29,152	1,128	3.86
第3回 1920(大正9)年8月 ～1921(同10)年7月	224,178	3,698	1.65
	1,965	22	1.12
計	23,804,673	388,727	1.22
	17,3513	5,085	2.9

注：上段：全国、下段：石川県

出典：『流行性感冒』内務省衛生局（大正10年12月）の巻末表より作成

1.1.1. 第1回流行状況（1918(大正7)年8月～1919(同8)年7月）

流行が始まったのは、1918年の8月下旬であったが、冬期に入り11月に最も感染状況が著しく、いったん12月下旬には下火となるも、大正8年の厳冬期には再び盛んとなったという。死亡率の推移について「報告書」は、「患者ニ對スル死亡比例ハ最初ハ比較的低ク流行ノ經過ト共ニ漸次其ノ率ヲ増セリ」という。

その蔓延の状況については、「交通頻繁ナル都市ニ発シ之ヨリ放射状ニ其ノ周圍村落ヲ侵襲スルヲ常トセリ」とし、市内では児童の欠席増、工員の欠勤が目立ってくるとあっという間に全市に蔓延し、学校・工場の閉鎖、さらにその後、時間差を持って都市の周囲に流行し、全県下に至ったとする。

地方によっては、医師、看護婦の不足、治療材料の欠乏により人心の不安を招いた。1819(大正8)年3月に至って病勢は次第に衰えたが、患者数に対する死者数は漸次高くなっている。その比率は全国平均1.22%であるが、弘安の住む石川県は2.74%と全国最高値を示している。

1.1.2. 第2回流行状況（1919(大正8)年9月～1920(同9)年7月)

1919(大正8)年10月下旬には、神奈川、三重、岐阜、佐賀、熊本、愛媛等で再び流行が見られた。そして、同11月に至ると、東京、京都、大阪を始めとして全国に散発的な流行を見るに至る。そして、「其感染者ノ多数ハ前流行ニ罹患ヲ免レタルモノニシテ病性比較的重症ナリキ、前回ニ罹患シ尚ホ今回再感シタル者ナキニアラサルモ此等は大體ニ軽症ナリシカ如シ」とし、大正9年1月には多数の患者・死者を出し、6、7月に至って終息を見たという。しかも、今回は「患者数ハ前流行ニ比シ約其ノ十分ノ一ニ過キサルモ其病性ハ遙ニ猛烈ニシテ患者ニ對スル死亡率非常ニ高ク三、四月ノ如キハ一〇%以上ニ上リ全流行ヲ通シテ平均五・二九%ニシテ前回ノ約四倍半ニ當レリ」とし、この時期の死亡率の高さを指摘している。

1.1.3. 第3回流行状況（1920(大正9)年8月～1921(同10)年7月)

第3回流行に至っては、「其ノ症状ハ普通ノ感冒ト區別スル能ハサル程度ノモノ多ク、(中略)各地方共多少ノ患者ノ散發ヲ見タリシモ流行甚シキニ至ラス」とし、その症状についても「悪性ヲ帯ヒス肺炎ヲ併發スルモノ殆ント稀ニシテ」、患者数の増減はあるものの、1921(大正10)年6、7月には終息している。

1.2. その対策・施策

1.2.1. 国の方針

国の対応方針として「報告書」では次の10項目を挙げているが、現在でも通用する事項である。

1. 一般の注意喚起のため、印刷物やパンフレット等の配布
2. マスクの使用奨励
3. 劇場、寄席、活動写真館等の入場者、電車、乗合自動車等の乗客に対しマスク未使用者の入場制限
4. 流行地ではなるべく多数の集合を避けること
5. うがい、予防接種の奨励
6. 頭痛、発熱など身体異状時には医師の診療を受けること
7. 患者はなるべく隔離し、全治するまで外出を避けること
8. 療養方法のないものについては救援の方法を講ずること
9. 市町村の伝染病院または隔離病舎を利用する方法を講ずること
10. これらを実行するため、地方団体、衛生団体、救援団体、学校、会社、工場その他公私団体並びに篤志家等の活動を促すこと

上記の1. に関しては1919(大正8)年1月に「流行性感冒豫防心得」を、1920(大正9)年2月にはポスターを作成している。

また、発生時には流行地に防疫職員を派遣し調査した上で、予防要項などを作成し道府県に周知を図っているとする。

1.2.2. 石川県の対策

「報告書」では、「道府県ニ於ケル施設」として各府県がとった感染対策についても纏めている。

予防対策として、石川県では「豫防心得書ノ配布圖解ノ配布又ハ活動写真ノ初メニ注意書きヲ映写シ豫防思想ノ啓発ニ努メタリ」としている。

マスクの使用を奨励するため、警察部衛生課では警察官全員にマスクを配布し、学校、工場主と協議して職員、生徒、職工にマスクを使用させ、警察官は受け持ち住民に使用させるよう勧めさせた。その結果、マスクが不足し、小売商に暴利を得るものが出てきたが、公益事業として実価格で販売するものが続出して普及が進んだ。しかし、遠隔僻地では一部の普及に止まったという。

予防接種については、その効果に論争があり、公務員、学校職員、生徒児童など一部の利用に止まったが、石川県の接種者数は624人と全国的にみても寡少な実績が示されている。

学校については、後述の通り「各学校ニ於テ学生生徒間ニ流行ノ兆アリタルトキ一週間乃至二週間休校セリ」と休校措置がとられた。

2. 米澤弘安日記等に見る感染の状況

2.1. 第1回流行期（1818(大正7)年8月～1819(同8)年7月）

(1) 流行の始まり

金沢での流行の契機に関しては、福井県文書館の柳沢英美子氏が、同館のホームページで紹介している以下の新聞記事が参考になる³⁾。記事の内容は、1818(大正7)年5月に石川県立工業学校生徒が修学旅行で東京へ行った途中で発病し、その後、軍隊を介して福井にも広がっていったとするものである。

●成金風⁴⁾の流行

金沢に於ける流行性感冒俗に成金風は去月縣立工業学校生徒が東京に於て修学旅行の途次発病し次で歩兵第三十五聯隊が縣下安井方面に野営中罹病せるを始めとして昨今各方面に蔓延し殊に曩に罹病者を出したる軍隊の関係者其他各隊将校の家族中発熱臥床中にあるもの少からず（ママ）各学校職員及び職工工女にも発熱せるものありと（金沢發）（『大阪朝日新聞北陸版』1918年6月17日）

修学旅行生の上京による感染が金沢市内で広がり、金沢の第九師団に属する歩兵第三十五連隊（福井市）の行動により福井方面にも広がったことを示している。さらに、前述の福井県文書館の柳沢氏によると、経済学者の速見融氏が「軍隊での罹患者の拡大」を指摘されているという。具体的には、同年6月中旬には第十二師団（福岡県久留米市）とともに、第九師団（石川県金沢市）でも師団員の1割にあたる670名が罹患したことが『福岡日日新聞』6月19日付け記事で報道されていたという。これは前述「報告書」の8月下旬端緒説を2カ月余り遡るものとなる。

(2) 流行の本格化

弘安の日記に初めて「スペイン風邪」に関する記述が登場するのは、新聞記事に基づくと思われる内容で、1918(大正7)年10月31日のことである(日記の表記は原文のママであり、誤字脱字あり)。

○大正7年10月31日 木 半晴 天長節祝日

◎全国至る處悪性感冒流行し、学校の休校せる處頗る多し 金沢も又流行中にて、誰彼となく掛った〜の話あり 私方には一同無事なり

当時の地方新聞、北國新聞の記事動向を見ると、石川県での流行の本格化は、1918(大正7)年11月に入ってからである。主な内容は学校の休校状況についてであり、金沢市内から小松市など地方、郡部に広がっていることが分かる。

この時期、米澤家では家族の殆どが発病している。

米澤弘安(1887~1972)は最後の加賀象嵌職人といわれた名工で、スペイン風邪の流行した1918(大正7)年当時、31才である。前年結婚し、翌1919年、長女が生まれている。家族として両親及び弟が同居しており、父、弟とともに自宅で金属象嵌工房を経営していた。

1918(大正7)年11月には、本人を含む家族全員が罹患している。全員医師の診療を受けている様子はなく、薬局より求めたアスピリン、アンチピリンといった市販薬を服用し安静にしており、基本的に仕事が可能であれば従事している。普通の風邪への対応と何ら変わらない。家族の動向を記した記事は次の通り。

1918(大正7)年11月8日 金 曇り時々雨あり

- ・清二は昨夜より、小生は夕頃より寒くて足腰力なく、立てはフラ〜としてどうも風邪ニ罹つたらしいから、母ニ店よりアスピリン・〇五、乳糖・〇五の合薬を買つて来て貰つて、清二と二人にて呑み早く休寝す

11月9日 土 日雲り少雨

- ・僕の風邪は、只咽喉が痛むのみにて他に何の事もなし せきの時々出て苦しい 清二は僕より少し強いやうた 芳野もせきをして居る 風邪ニ罹つたのたらう

11月10日 日 曇強風 霰降る

- ・清二は十一時頃、尾張方面も見たいし、次手ニ澤野よりアスピリンを買つて来るとて行き、土方様へも寄つて来たニ、お母様起きて台所ニ居られ、鉦ちやんはまた風邪全快せず寝て居たと 藤掛へも寄りしニ栄ちやが臥て居た 昨夜は熱出で氷で冷したと
- ・僕の風邪は咽喉ニ取ついたか、せきをすれば痛い 聲か出悪くなつた 芳野もせきをすれば、咽喉より胸あたりまで痛い 清二もセキか止ない 三人でアスピリンを呑んで居る

11月11日 月 日雲 風あり 霰降る

- ・今朝は又九時頃朝寝した 清二も九時半頃迄寝て居た 芳野又全刻迄起き得ない 若者三人共風邪ニ苦しみ、意気地なき事と思ふか仕方ない 僕は咽喉の痛いのニ閉口したが、梅干の黒焼をして貰つて呑みしニ、直ニよくなった

11月14日 木 雨

- ・今朝は熱か出て十時頃迄寝た處、寝汗でひつしよりになった

12月22日 日 晴 小雨

- ・母は少し風邪の気味あり 芳野も少し引いて居る

12月23日 月 小雨

- ・母は感冒に罹られ、咽喉も悪くセキか出て困つて居らる 夜、アンチンピリン（ママ）を吞まる

12月24日 火 晴

- ・母は今日は大儀らしく、終日寝て居られた

12月26日 木

- ・母は其後漸々ニ病氣よくなりしか、全快する迄ニ至らず年を越せり

そして、名古屋の兄宅、金沢の親戚、知人などの罹患が記されている。名古屋在住の兄佐吉（注:画家、光雪）一家では家族ぐるみ罹患し、知人では一家で複数の死亡などの記事が認められる。その葬儀には特に隔離して参加などの規制はされていないようである。何れも突然の不幸に対する嘆きに満ちている。親戚、知人に関する記事は以下のとおりである。

（1918(大正7)年）11月6日 水 雨

- ・…小林様へ御伺すると初め敏雄か始めて風邪を引きてより三人目にて、奥様か昨日より風邪ニ掛られて臥て居らる由 お母様ニ御見舞を云つて出る

11月12日 火 曇 午前半晴

- ・名古屋の兄上より葉書来り、去月廿日頃より鶴子様流行風邪ニ罹りてより一同が罹り、此頃は皆全快せりと

11月15日 金 半晴 少雨

- ・(弘安の母は) 小林様へ寄つて来たと 小林様の奥様は今ではよい由 敏ちやんか一番重くて、血を吐いた程たつたそうな

11月17日 日 日雲り

- ・尾張町伊藤様の嫁様風邪ニかゝられしか、心臓が悪く醫師も警戒せねばならぬと云つて居るとの話を聞きしか、昨夜通治様の話では、清水様、上田様ニ見て貰つたが肺炎ニなつたやうたとの事であつたから、本日午后母ハ玉子を持つて御見舞ニ行かれしニ今日は熱も下り、よきようだとの事であつたと 藤掛方へ一寸寄りて聞く處ニ依れば、伊藤の嫁様のお里(越中福野)のお母様が死なれた由 本人は病氣の事故秘してあるので、本人は又お里のお母さんと呼んでくれと云つて居らる由 浮世かなである 早く全快を祈る 当人ハ目下妊娠七ヶ月なりと ・野村灰店の嫁様か、安江町の叔母様の處へ嫁入して居た人なるが、故ありて離縁となり帰つて居られ、病後の處へ風邪ニ取付かれ、昨夜死去せられし由 家内ニ皆風邪で臥て居し為、死なれてるのを知らずニ居たのだとは、可愛想な事だ

11月18日 日 曇雨

- ・野村灰屋の嫁様の葬儀は、本日午後三時なるか遅れた 四時過となり、父は参詣せられた 午前中母が御悔ニ行かれた お母様も兄様も風邪で臥て居のだそうな 困った事であらう 嫁様は安江町より離縁されて来て居られたのだとは不幸な人だ
- ・伊藤様の嫁様御病氣にて、昨日は母がお見舞ニ行きしが、僕は今日夜の九時頃ニお見舞ニ行くと、夜八時頃より俄ニ様子変わりてもう駄目だと皆々様、夜伽して居られ僕も驚いた 嫁様のお里ハ越中福野にて、お里にもお母様か死亡せられて今日か葬儀の由高岡ニ居らる姉様が葬式終り仕だい来澤するとの事で、只それのみを待つて居られたか、十時四十分着の列車を待ちに待つて居られたか仕だいニ陰悪となって、十時三十分遂ニ息を引取られ、残念な可ら逢はずニ死なれた 僕は死亡の電報を福野の新山久太郎方へ打つ事の依頼を受けて郵便局へ行き、トヨ子只今死すと打ち、時間外にて四十銭であつた 直ニ帰宅して話すと、宅では皆驚いて居られた 芳野はかなしんで居たか、これも浮世で仕方がない

(1919(大正8)年) 2月14日 金 雨

- ・堅町古田魚次郎様より案内状来りしニ付見れば長男の貞三様が病死せられたとの事 驚いた 嘸、御両親ハ落膽せられたであらうと拝して、午後父は香典を持つてお悔ニ行かれたら、神戸にて例の悪性感冒ニ罹られてこの仕末と承る 昨夜、死体当地へ来たので本日案内せし由にて、明日午後二時出棺葬礼ある由 日蓮宗にて父の行かれし時お経の最中なりしと 当年二十五才位の若人にて実ニ残念の至りなるが是も浮世の習なるかと 其は可なさを思ふ

この時期の新聞は、連日のように流感の動向を伝えている。その見出しを並べて見ると次の通りであるが、最初は学校の休校についてを主としており、金沢市内で休校が続出し、しだいに小松市、能美郡など地方、郡部や職場等に広がっていることが分かる（以下見出しのみ）。

- 昨今尚ほ感冒激甚 ◇各校職員生徒に多し 『北國新聞』1918年11月5日
- 引き續き猖獗の流行感冒◇益々蔓延の兆あり 『北國新聞』1918年11月6日
- 小松の悪性感冒猖獗 惨たる小松校＝幼稚園休校 『北國新聞』1918年11月6日
- 流行感冒◇各地方の状勢 『北國新聞』1918年11月9日
- 猖獗を極むる小松の成金風◇死亡者の激増 『北國新聞』1918年11月10日
- 感冒◇各校尚未だ猖獗 『北國新聞』1918年11月10日
- 流行性感冒死者多し◇市中小学校終熄期 『北國新聞』1918年11月12日
- 終熄期近ける悪性感冒◇郡部は尚猖獗 『北國新聞』1918年11月14日
- 昨今の金澤監獄◇悪性感冒に襲はる 『北國新聞』1918年11月16日
- 悪性感冒◇驚くべき罹病者 産婦の死者多し 郡部尚猖獗 温泉大打撃 『北國新聞』1918年11月16日
- 悪性感冒交換手を襲ふ◇其の四割半の缺席 『北國新聞』1918年11月17日
- 寺井校の休校 『北國新聞』1918年11月17日

○能美郡猖獗◇小学校の休校續出 『北國新聞』1918年11月21日

○教員死去多し 『北國新聞』1918年11月22日

○縣下に於ける感冒患者 『北國新聞』1918年11月26日

さらに、隣の福井県内では村の全滅、県内では一字全滅という記事も登場している。

○感冒の為一村全滅（福井県内） 『北國新聞』1918年11月21日

○一字全滅◇一家三人以上病臥 『北國新聞』1918年11月22日

そして、この11月には肺炎の併発による死亡者の増加が著しく、また、妊婦の死亡が散見される。そのため、火葬待ちの状況が生まれ、焼却施設の増強が行われている。

○流行性感冒死者多し◇市中小学校終熄期 肺炎に變症 『北國新聞』1918年11月12日

○終熄期近ける悪性感冒 ▲死亡増加三倍 『北國新聞』1918年11月14日

○三ツ児の流産◇悪性感冒の為め 『北國新聞』1918年11月16日

○死者多し◇昨日は火葬場満員 『北國新聞』1918年11月17日

○火葬竈修繕◇釜數五十個以上 『北國新聞』1918年11月21日

このように、弘安日記と新聞記事は内容が連動しており、家族の罹患や知人の死去などが身近で発生している。そのような生活環境ではあるが、仕事は変わらず続けており、葬儀も隔離して実施されている様子はない。悪性ではあるがあくまで風邪であるといった対処のように見える。

2.2. 第2回流行期（1919(大正8)年9月～1920(同9)年7月）

第2回流行期には家族の6人のうち、母、弟、妻及び長女の4人の罹患が認められる。嫌がる母にはようやく医師の往診を依頼しているが、弟は市販薬で治療している。

大正8年12月24日 水 晴夜雨

- ・(母は) 午後又々工合悪しとて寝られた故、規尼ネ丸(ママ)を買つて来て吞まれ、夜食事進めぬ故シロ飴を買つて来て上げた 熱はなけれ共心臓の鼓動ハゲシク苦しき由なり 其上セキが出るので尚困るなり

12月25日 木 雨

- ・母は午前中ハ少しよいか午后ニなると悪くなるやうだ 醫師ニ掛ればよいのだがいやと申さる故仕方なく廣瀬按摩を呼んで呉れと云ふので午后来てひねつて貰ふ

12月31日 水 曇

- ・母は今日工合悪く頭痛み心臓悪く、午後嶋醫師に来て貰つて見て貰った 芳野ニ薬を取ニ行つて貰ふ

大正9年1月6日 火 晴 小寒の入

- ・母は与程よきとてそろ〽と醫師の處へ行かれた(午前中)

1月18日 日 晴後雨

- ・清二は風邪の氣味にて躰が怠いとの事故キナピリンを買つて来て吞まし午後より寝さした 少し熱が出た由

1月19日 月 雨

- ・清二の風邪ハ今日は少しよい方でそれでも養生が大事故一日休む

1月22日 木 雪

- ・芳野ときよ子は風邪ニかゝり鼻がつまつて大困り 清二も与程よきがセキ止らず
(以降略)

また、この時期には、知人や知人の若い後継者の死亡例が見られる。関係する日記の記事には以下のようなものがある。

(1919(大正8)年) 12月20日 土 曇

- ・吉野が夕頃伊藤様へ寄りしが、武吉様の風邪にて十七日より寝られしニ与程悪い由聞いて来た 夜、土方の通治様が来られて武吉様ハ午後七時頃死去されたとの知せあり大ニ驚いた 只仮そめの病氣と思ひ居しニ加様な事ニなる事とも思わず、吉野も先程逢つて来なかつたが残念だと云つて泣きしもせむ可たない 伊藤様の中心となつて居る人だに実ニ氣の毒な事となつた 老両親の嘆きの思ひやられていたわしい

(1920(大正9)年) 1月29日 木 雨

- ・東京浅草の松本總雄様、流行性感冒にて廿七日午後六時死去せりとの案内あり 実ニ惜き事をせり 親達の嘆き嘸と思わる 逆様ニなるのニは大ニ困る

2月6日 金 少雪 寒し

- ・今日の新聞にて越井様の内儀様流感にて死去せられし由を知り父は午後三時、宮崎様方へお悔ニ行かれ武作様と色々話して夕帰宅せられた 越井様には百五十日以前ニ二番ノ娘様死去せられ舊臘には御老母の御死去あり 續いて又の御不幸にて返す〱もお氣の毒な至題であつた

2月8日 日 曇チラ〱雪 大ニ寒し

- ・…小林自轉車の末の女ノ子当年九才が昨夕死亡にて、本日午後二時葬儀にて今出る處なりとの知せで清二は大急で仕度して参詣ニ行く 何も知らぬ事とて驚いた 流感にて尚三郎もお内儀も悪いのたと 不幸の至にて清二は後よりお悔ニ行く

2月17日 火 快晴

- ・昼休ニ喜代子を抱きて川岸ニ居ると辰巳君が来て今天地君方へ寄ると兼て流感ニ罹つて居た鎌吉君が只今死んだとの事 誠ニならぬ位なり 一週間足らず寝て居たので重くなつたのか二日間程であつた由 天地方も不幸の家にて娘様やお母様、文様、鎌吉君等皆大きくなつてばた〱死ぬとは、親父様の嘆きさこそと思ひやらる 鎌吉君二十九才なりと

新聞記事では、第2回流行期には肺炎に移行して重症化、そして死に至る例が増加している。新聞記事の見出しのみ示すと以下のとおりである。

- 五日間の死者七十 前例のない多数＝感冒猖獗の兆 『北國新聞』1920(大正9)年1月7日
- 感冒七聯隊を襲ふ 『北國新聞』1920年1月7日
- 流行性感冒追々猖獗 目下の所二千名に近き患者 『北國新聞』1920年1月7日
- 流行性感冒愈々猖獗 一日の死亡者十数人に上る 『北國新聞』1920年1月9日
- 感冒豫防策 縣衛生課では告諭を發し 『北國新聞』1920年1月16日
- 縣下の流感は下火 『北國新聞』1920年1月24日
- 感冒猖獗で海女休校 『北國新聞』1920年1月30日
- 感冒愈々悪性となる 『北國新聞』1920年1月30日
- 下火に成つた流感 併し悪性を帶て来たから決して油断はならぬ!! 『北國新聞』1920年2月3日
- 第七聯隊の面会解禁 『北國新聞』1920年2月5日
- 流感師範校を襲ふ 『北國新聞』1920年2月10日
- 死亡率は著しく増加す流感の悪性化 『北國新聞』1920年1月14日
- 第七聯隊に流感發生 『北國新聞』1920年3月6日
- 流感愈終熄 軍隊でも今日からマスクを止むる 『北國新聞』1920年3月25日

石川県では前述の通り、警察官を通じてマスクの普及が進められたものの、反面、マスクが品不足になっている。

- 日毎暴騰するマスク 『北國新聞』1920年1月16日
- 藝娼妓にもマスク 『北國新聞』1920年1月23日

2.3. 第3回流行期（1920(大正9)年8月～1921(同10)年7月)

第3回流行期には、家族全員の罹患が認められるが、症状は軽い様子が窺える。しかし、知人宅では流行性感冒による死産の例が見られる。

大正10年3月7日 月 日雲り

- ・(夜川辺様へ行く) 後の宮口様の内儀は七カ月妊娠にて流感ニ罹られし為、胎児死産したる由 産婦も氣遣る 三人の子もあり、とふかして全快すればよいかと祈る

新聞記事でもこの時期には流行性感冒の記事が殆ど見られない。感染が話題にならない状況になっていたのではないかとも思われるほどであるが、そうではない。感染がきわめて日常的になってしまったからである。記事は少ないが感染状況はいわゆるクラスターの発生であり、深刻である。

- 郵便局にも感冒流行 恐慌一方ならず 『北國新聞』1921年3月8日

さらに、軍の感染状況を見ると、この期間においても感染は決して沈静化していたわけではないことが分かる。1918年、ロシア革命に伴うシベリア出兵は続いており、金沢の第九師団はこの時期出動を控えていた。なお、金沢は日清戦争後第九師団が置かれて「軍都」の性格を強めた。人口の一割を軍関係者で占め、都市の経済も軍の消費が支えていたので、

その動向は注目されていたのである⁵。

○軍隊の流感閉熄 目下百四名 『北國新聞』 1921年2月10日

○出動を目前に控えて感冒隙を窺ふ 『北國新聞』 1921年3月8日

2.4. 流行期の生活状況

以上から、以下の事項が把握出来る。

- ・（必ずしも流行性感冒とは言い切れないが、）家族全員が各流行期において、罹患している。そのうち第1回目の方が症状が重く、その後は症状が軽かったようである。
- ・医師の診療を受けているのは、心臓に異常が見られた母のみであり、その他の家族はアスピリンなど市販薬の服用及び休養に止まっている。
- ・罹っていても症状の改善が見られれば、仕事には従事している。
- ・弘安一家については、マスク使用の様子は見られない。
- ・金沢や名古屋の親戚においても家族ぐるみの罹患が認められる。
- ・知人の中には一家で罹患し、複数の死亡者が出ているケースが見られる。
- ・知人の例では、後継者と目される若い人の死亡が認められる。
- ・妊婦の死産や死亡例が身近でも見られる。
- ・葬儀に参列しても隔離等の対応例は見られない（あるいは、記述がない）。

まとめ

以上の検討から、「報告書」や新聞記事の内容が米澤弘安一家の身边においても同様に起きていたことが認められる。現下のコロナ禍と比較し、圧倒的に罹患率や死亡率が高いことから、日常的な罹患と死亡といういわば異常な日々を送っていたと考えられる。

また、国の対応方針に関しては現在のものと大差はないと考えられるが、衛生観念、衛生環境、医療レベル、国民の栄養状況など多くの観点で現在とのギャップがあることも大きな要因であろう。

註

- ¹⁾ 米澤弘安日記編纂委員会編『米澤弘安日記』全4巻、金沢市教育委員会(2000-2003)
- ²⁾ 『流行性感冒』内務省衛生局(1922)、国立国会図書館デジタルコレクション (2020年9月13日確認)
- ³⁾ 福井県文書館 HP の1918年の福井県下インフルエンザ・パンデミック（「スペインかぜ」）
<https://www.library-archives.pref.fukui.lg.jp/fukui/01/20200522R/20200522.html> (2021年2月21日確認)
- ⁴⁾ 記事中の別名「成金風」と呼ばれているのは、第1次世界大戦による好景気を背景としており、終戦に伴う景気の悪化に伴いしだいに使われなくなる。
- ⁵⁾ 本康宏史『軍都の慰霊空間』（吉川弘文館,2002）に詳しい。

